都小特活
第102号
東京都小学校特別活動研究会
平成30年3月発行
発行人
清水晶子

◎平成29年度◎

東京都小学校特別活動研究会

研究発表大会

平成29年度東京都小学校特別活動研究会の研究大会が、去る2月23日(金)に中央区立有馬小学校を会場として開催された。本研究会では、「自己有用感を高める望ましい集団活動」を研究主題に研究を進めてきた。今年度はその２年目として、研究の基調報告を受け、新教育課程プロジェクト、学級活動部、児童会活動部、クラブ活動部、学校行事部の１つの特設プロジェクトと４つの活動部会が研究を進めてきた。

研究発表大会の概要は、次の通りである。

活気にあふれた研究発表大会

年度末の多用の中にもかかわらず、全国各地から約250名を超す方にご参会いただいた。新学習指導要領のキーワードである「人間関係形成」「社会参画」「自己実現」の育成に向けて、特別活動が担う役割への期待の大きさを感じられる大会となった。

会長　清水晶子
（中央区立有馬小学校長）

大会は、開会のことばに続き、清水会長から次のような挨拶があった。

はじめに、この夏に読んだ本について触れ、その中に出てくる方の話として、人間として幸せなことは、「人に愛されること」「人に必要とされること」「人に役立つこと」「人に褒められること」であることという言葉から、本大会の研究主題にあるまさに「自己有用感」であると述べた。児童に自己有用感を育てることで、これからの生活をよりよく創造し主体的な生き方へと繋がっていくことを確信している。学級活動（3）も社会の一員としての役割を果たしていくなどの点から新学習指導要領に示された。

「なすことによって学ぶ」の基本原理どおりに実践した研究内容を分かりやすく伝えていき、各学校での特別活動の実践に繋げていっていただきたい。

続いて、ご多用の中ご列席いただいた来賓・顧問の先生方がご紹介された後、佐野研究部長より研究基調報告がされた。その後、プロジェクトチームの報告に続き、各活動部がそれぞれの創意工夫を凝らして１年間の研究内容や成果・課題の発表を行った。（詳細は、２・３ページ参照）

最後に、指導講評を文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官　安部 恭子先生から指導講評と『新学習指導要領の実施に向けて』との演題で講演いただいた。来年度実施される学習指導要領のポイントや指導の充実に向けた多くのご示唆をいただいた。（詳細は、４ページ参照）

研究発表大会次第

進行　庶務部長　中村和弘

（1）開会のことば　副会長　赤羽根　智

（2）あいさつ　会長　清水晶子

（3）来賓あいさつ・紹介

（4）基調報告　研究部長　佐野　匡

（5）研究発表　司会　研究副部長　岡野範嗣

○新教育課程プロジェクト

『「学級活動（3）一人一人のキャリア形成と自己実現」についての考え方と実践事例』

○学級活動部

『もち味を生かし、互いに認め合い、高め合う学級活動』

○児童会活動部

『互いを認め合う異年齢交流を深める児童会活動』

○クラブ活動部

『個性を発揮し、互いに認め合うクラブ活動』

○学校行事部

『自分のよさや役割に気付き、互いに認め合い、活かし合う学校行事』

（6）指導・講評

『新学習指導要領の実施に向けて』

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官
安部恭子先生

（7）閉会のことば　副会長　木田明男

◎学級活動部◎

『もち味を生かし、互いに認め合い、高め合う学級活動』

1　発表者

酒井博子　教　諭（東久留米市立第六小）
藤田寛樹　主任教諭（文京区立湯島小）
金澤勇輝　教　諭（大田区立馬込小）
奥山優子　教　諭（江戸川区立第六葛西小）

2　研究発表

（1）研究内容

自己有用感を高めるためには、「一人一人がもち味を生かして活躍できること」や「仲間から必要とされていること」、「自分が役に立っていることを実感できること」が必要である。自己有用感を高めるための可視化や振り返りに視点を当て、研究主題「もち味を生かし、互いに認め合い、高め合う学級活動」と設定し、手だての検証や学級活動（2）と（3）の整理などをした。

（2）手だての具体例

○自己有用感を高めるための可視化の工夫
・要素カードの生かし方
・振り返りカードの掲示
・ＩＣＴの活用
○互いに認め合い高め合うため活動の充実
・計画委員会の指導
・適切な中途の助言
・終末の助言の工夫
○自己有用感を高めるための手だての有効性の把握
・振り返りカードから
・「○年○組」の作文から
・実態把握のためのアンケートから
○各学校で組織的に取り組むための工夫
・次期指導要領に対応した学級活動（1）（2）（3）の年間指導計画の作成
・次期指導要領に対応した発達段階による「とらえておきたい『学級会』の観点」の改善
・学級会資料、グッズ等の提供

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○教師が児童一人一人のもち味を価値付け、指導に生かすことを繰り返すことで、児童自身が自分のよさを実感し、学級の中で活躍できるようになっていった。
○アンケートなどの分析から分かったことと教師の目指す姿を関連付けて、児童の自己有用感につなげることができた。

〈課　題〉

○アンケートなどの分析結果やもち味を児童に返し、さらなる成長へとつなげられるような工夫をする必要がある。

◎児童会活動部◎

『互いを認め合う異年齢交流を深める児童会活動』

1　発表者

渋井洋子　指導教諭（東久留米市立南町小）
畑　理恵　主任教諭（葛飾区立南奥戸小）
佐藤真美　主任教諭（小平市立小平第十二小）

2　研究発表

（1）研究内容

児童会活動における自己有用感を「自分は必要とされている」「自分は役に立っている」と思える感情と定義し、それは他者に認められてはじめて得られるものであると考えた。

その中で児童の自己有用感を高めるためには、「あこがれ」や「思いやり」の気持ちを可視化して伝えることや、場の設定を工夫することが必要である。

「あこがれ」と「思いやり」のスパイラルを意識した異年齢交流を積み重ねることで、自己有用感が育ち、高まり、よりよい人間関係を築くことができると考えた。

（2）研究の視点

①自己有用感につながる「あこがれ」と「思いやり」の可視化の工夫。
②『メッセージボード』を継続し、手だての有効性をさぐる。
③学校全体で異年齢交流を組織的に取り組み、活動を広める。

（3）検証授業

葛飾区立南奥戸小学校・代表委員会
小平市立小平第十二小学校・代表委員会

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

メッセージボードを活用し、フロアー側からリーダー側へ、リーダー側からフロアー側へ「あこがれ」と「思いやり」を可視化することを通して、相手意識が育ち、自己有用感やさらなる活動への意欲の高まりにつながることが再認識された。

〈課　題〉

活動の振り返りやメッセージボードに書く内容が、「あこがれ」と「思いやり」の視点に迫れるように、具体的な手だてをさらに探る必要がある。基本的な代表委員会や委員会活動の在り方（「児童の発意・発想を生かした活動」の場を保障すること、「計画」から「振り返り」までの活動を一連の活動としてとらえること）について見直し、より多くの学校に広めていきたい。

◎クラブ活動部◎

『個性を発揮し、互いに認め合うクラブ活動』

1　発表者

山口哲郎　教　諭（葛飾区立本田小）
高橋信行　教　諭（足立区立千寿第八小）
藤井美貴子　教　諭（世田谷区立中町小）

2　研究発表

（1）研究内容

本研究部では、「個性」とは集団の中でよりよく発揮され、他者と協調できる個性であると考える。児童が、望ましい集団活動を通して、互いの個性に気付き、その多様なよさを集団の中で発揮することで、自己有用感が高まると考える。今年度は、これまでに研究してきた手だてが自己有用感を高める上で有効であったか検証できるよう、児童の作文やよいところを見付け、振り返り等を分析するなど、児童の変容を見取る方法について実践を通して追究した。また、全校でクラブ活動を推進するために、教師の共通の理解や指導体制を基盤として計画的に指導が行えるよう、学校全体での組織的な取り組みについて、これまでの実践を整理し手だてとして指導案に明記した。

視点１　望ましい集団活動をよりよく展開する可視化の工夫
視点２　自他の個性に気付き、認め合う振り返り
視点３　手だての有効性の検証
視点４　学校全体での組織的な取り組み

（2）授業実践

葛飾区立本田小学校　　スポーツクラブ
足立区立千寿第八小学校　なわとびクラブ
世田谷区立中町小学校　テーブルゲーム&カルタクラブ

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○「よいところ見付け」は、相互評価を行ったり、視点を共有したり、伝え方を工夫したりするなど、新たな取り組みを行い、より一層異年齢の人間関係が広がった。
○個や集団の変容を見取り自己有用感の高まりを検証する方法と、校内で共通で活用できるよう「クラブ活動計画カード」の活用方法を紀要にまとめることができた。

〈課　題〉

○「共通の興味関心」をさらに追求させるための指導を工夫する。
○新学習指導要領の理解を深め、指導方法を改善する。

◎学校行事部◎

『自分のよさや役割に気付き、互いに認め合い、活かし合う学校行事の工夫』

1　発表者

原田恵子　主任教諭（中央区立有馬小）
平山かおり　主任教諭（目黒区立東山小）
髙橋　創　教　諭（清瀬市立清瀬第三小）
宮口大介　主任教諭（中野区立平和の森小）
松本明子　主任教諭（北区立稲田小）

2　研究発表

（1）研究内容

研究主題の実現に向け、互いのよさや役割に気付き、認め合い、活かし合う学校行事の工夫を研究内容とした。

（2）研究授業

事例１　遠足・集団宿泊的行事
〔宿泊行事の事前指導〕……５年
事例２　健康安全・体育的行事
〔運動会の事後指導〕……２年
事例３　文化的行事
〔学芸会の事前指導〕……５年

（3）研究の視点

視点①　行事のつながりの中で、活動の見通しや自分の目標をもつことができる指導の工夫
視点②　自己有用感を感じられる振り返りの場や観点の工夫
視点③　自己有用感を高めるための可視化の工夫と活用

3　研究の成果と今後の課題

〈成　果〉

○行事のつながりを意識した事前・事後指導を積み重ねたことで、児童が自分に付いた力を実感でき、自信やつぎの行事への意欲をもつようになった。
○行事の取組や振り返りを可視化したことで、活動が学校全体に広まり、児童の意欲や期待感を高めるだけでなく、若手教員の育成にもつながった。

〈課　題〉

○学校行事の指導や評価は発達段階に応じて学校全体で共通の視点をもって行うことが重要であることを広め、実践できるようにしていく必要がある。

都小特活研究発表大会記念講演

講　演／「新学習指導要領の実施にむけて」
講　師／文部科学省初等中等教育局　教育課程課
教科調査官　安　部　恭　子　先生

1　はじめに

研究主題「自己有用感を高める望ましい集団活動」について、自己有用感を高めるというのは日本の若者の近々の課題である。自己有用感を高めるためには、集団の中で役割を担い、役割を果たして「自分もやればできる。やってよかった。」と、いう思いや、他者からの評価によって、高まってくる。

2　特別活動と相互関係

特別活動の内容は、学校の教育全体に関わることである。知識・技能は、個別に学んだことを活用できるようにし、話合い活動は、低学年から積み上げていくことが大切である。思考力・判断力・表現力などは、よりよく合意形成をしたり、意志決定をしたりしていくことに必要である。そのためには、話合い活動の充実が大切である。特別活動は各活動におけるグループ活動の協働的な学びの基盤である。

特別活動の資質で、一番大事にしたいものは、子供たち自身がなりたい自分になることである。子供たちは、集団や社会の形成者としての視点をもって、生きて行かなくてはならない。集団の中で人間関係をよりよく構成していくための資質能力は、解説の中で例示している。

特別活動の全体目標では、資質能力を示したが、学級活動、児童会活動、クラブ活動、委員会活動のそれぞれがかみ合っていて、学級活動で身に付けた能力をクラブで生かす、クラブ活動で身に付けた経験を委員会活動で生かすことなどが大切である。

3　学級活動（3）キャリア教育について

今回、小学校、中学校と、学級活動の内容項目は全く一緒にしている。学級活動の目標等についても、小学校と中学校と寄せている。小学校の学びをしっかりと中学校につなげ、中学校は小学校の学びを生かして発展させるようにしている。

今の若者の課題は、たとえばＯＥＣＤの学力調査等では、「学力は高い。だけど学ぶことが楽しいとか、今学んでいることが将来の仕事に生きるという意識が低い。」ということが挙げられる。そのため、学校での学びが実社会でつながっているか、今の学びが将来の何につながるかを意識して、教員は指導しなければいけない。今後の日本社会を生きていくためには、自分への自信を高めていくことが大切である。くじけがちの子が多く、自分にはダメなところがあると思う若者が、諸外国と比べて、日本は、突出して高い。そんな世の中だからこそ、子供たち自身が、自分のよさや可能性を分かって、それを発揮して生きていけるようにしなければならない。だからこそ、学校全体でキャリア教育を推進していく必要がある。今回、新学習指導要領では、小・中・高の系統性を明確にしながら、キャリア教育を中核として示された。「学ぶことと自己の将来を見通しながら」という表現が、小学校にも中学校にも入り、「特別活動を要としつつ」という表現になっている。キャリア形成というのは、「社会の中で役割を果たしながら、自分らしく生きる。なりたい自分やよりよい自分になるために頑張っていく。」という子を育てていくことである。これからの学びや生き方を見通しながら、今までの活動を振り返って、今の自分をよりよく改善していくことである。それのためには、子供たちが、これまでの生活や学習を活動を振り返り積み重ねていけるような、ポートフォリオ的な教材の活用も大切である。

キャリア教育といった点で、将来への希望と自己有用感、自己肯定感との関係を見ると、将来への希望がある人は、自分に満足しており、将来への希望がない人は、自分に満足していないというデータの結果が出ている。（「子供若者白書」）。自分に満足感をもち、希望をもって生きていくためには、集団の中で役割を担って、それを果たして、「自分もやればできる。やってよかった。役に立った。自分にもいいところがある。」という経験をさせていくことが大切である。

4　学級経営の充実と学級活動

学級経営の充実もとても大切である。学級生活の基盤となるのは、教師と子どもの信頼関係と児童相互のよりよい人間関係である。それが、学級活動の一番の基本である。学級活動における児童の自主的・自発的活動を芯として学級経営は充実が図られる。学級活動における自主的・自発的な活動は、活動内容（1）になる。子供自身が自らの学級生活をよりよくしたり、人間関係をよりよくしたりすることにより、居心地がよく安心できる共感的な土壌ができる。そして、学びに向かう学級集団を形成するわけである。なお、学力学習調査を分析したところ、特別活動を熱心にやっているという回答をした学級の子供ほど学力学習調査でのテストの結果が全ての教科で高いと出ている。

学級活動も特質に違いがある。（1）は、集団でなければ解決できないこと、集団で取り組むことであり、（2）、（3）は、一人一人が努力することである。このように、合意形成と、一人一人の意志決定という表現で今回、まとめている。

合意形成とは、意見の違いや多様性を乗り越えたり、よりみんなで知恵を出し合ったり、よさを生かしたりして、よりよく決めていくということである。

意志決定は、キャリア教育ということもあり、「一人一人が自分の意志をもって、粘り強く努力していけるように」という思いも込めて一人一人の意志決定という表現にしている。

これまでの特別活動を大切にしつつ、新学習指導要領の改訂に併せて、表現を少し変えているのである。今までの集団決定で子供たちのよさを生かしながら、思いを一つにして決めていき、それに向けて努力する特別活動の取り組みを生かしている。さらに、今回は、合意形成、折り合いを付けていくということを大切にしている。また、意志決定といったときに自己決定するということが大切なのである。学級活動の目標は、（1）（2）（3）の学習プロセスを示している。（1）、（2）、（3）については、学習過程を大切にしている。実践が大事なのではなく、実践の前の事前指導から事後までの一連の流れが大事である。振り返って、次の課題解決につなげることである。（1）（2）の流れは同じだけれど、違うのは、解決方法の決定である。

（2）は、特につかむ段階で子供たち自身が自己の課題をしっかり把握していなければならない。最初の課題把握が甘いと、最後の曖昧な目標になる。（2）は即時速攻、決めたからには改善できるようにすることが大切である。

（3）は、つかむ・探る・そして資料などを参考にしたり話合いをしたりしながら、見つける・自分は何ができるかを一人一人が意志決定するという学習過程が大切である。そして、今の学びが将来につながるように、具体的なめあてを立てたり意志決定をしたりする。自分をしっかり理解し、振り返った時に、目標に向けて頑張ったことや、それが未来の自分に役立つのだということ、これからの生活や生き方に大切であるということが意識できるように指導助言することが大切である。

5　おわりに

特別活動は、学級経営の充実や、キャリア教育の要、いじめの未然防止が期待されている。各学校では、年間指導計画の見直しなどしているところではないだろうか。こういう力をつけたいから、こういう活動があると明確にみえることが必要であり、学校全体で共通理解を図ることが大切である。

子供たちが、社会参画や自己実現の力を発揮し子供たち自身が自分にもよいところや可能性があること、前向きに自分らしく生き、なりたい自分をみつめていくことを実感できるような取り組みを今後もしていってほしい。

編　集　後　記

会報102号をお届けします。年度末のご多用の中、ご協力いただきました諸先生方に、深く感謝いたします。

（編集部：石田、篠、大野、藤井、酒井）